

食育・起業を通じた地産地消活動への支援

■ 小豆郡生活研究グループ ■

（小豆農業改良普及センター 藤田則久 ○村尾由佳）

●対象の概要

小豆郡生活研究グループは、県内他地域の生活研究グループと異なり、町ごとの連絡協議会が組織されておらず、生活研究活動に関心を持つグループと個人で平成14年に結成されている。グループは22人で構成され、地産地消の推進による地域の活性化を目指し、オリーブを活用した起業活動や食育活動を積極的に行っている。

●課題を取り上げた理由

平成25年度のグループ員数は26名であり、年々、減少するとともに、高齢化も進行している。

現在、会員は意欲的であり、積極的な活動を行っているが、今後さらなる会員の減少と高齢化が予測され、活動の低迷が危惧される。

そこで、組織の維持・発展に向けて、食育や起業を通じた地産地消活動の今後の方向性を検討することとした。

●普及活動の経過

1 食育活動の広がりへの支援

小豆島の特産品であるオリーブに子供の頃から親しんでもらいたいと考え、園児やその保護者を対象に、オリーブを使った料理や郷土料理の食育活動を継続して取り組んでおり、27年度からは共同募金助成金を活用し、活動資金の確保に努めている。

また、28年度は、県連60周年記念大会の準備があり、食育活動の回数を控えたものの、老人クラブからの要望を受け、初めて高齢者を対象とした食育活動を実施した。

1人暮らしの高齢者が増加する中、高齢者への食育、特に、共食することの重要性が注目されていることを踏まえ、小豆島の新しいご当地料理である「ひしお井」や「オリーブを使ったサラダ」などの調理実習を行った後、フラワーアレンジメントの体験で交流を深めた。



高齢者対象の食育教室

さらに、生活研究グループの食育活動を以前から知っている他の女性団体より自ら食育活動を行いたいと要望があり、グループがこれまで活用してきたレシピの提供や当日は役員が活動に協力するなど円滑な運営を支援した。

年度	町	参加者	人数
26	小豆島町	小豆島こどもセンターの園児及び保護者	44名
	土庄町	四海幼稚園	17名
	小豆島町	苗羽幼稚園	37名
27	小豆島町	橘こども園の園児	13名
	小豆島町	小豆島こどもセンターの園児	34名
	小豆島町	苗羽幼稚園の園児及び保護者	44名
	小豆島町	苗羽幼稚園の園児及び保護者	38名
	土庄町 小豆島町	安田幼稚園の園児 四海幼稚園の園児 福田幼稚園の園児	23名 8名
28	小豆島町	安田下八老人クラブ	11名
	小豆島町	安田幼稚園	31名

2 起業活動についての検討支援

平成23年から開始した起業活動では、オリーブの新漬けや佃煮、からし漬けのほか、サツマイモを使った「いがぐり揚げ」等を、主に「小豆島町ふるさと商工まつり」等の島内外でのイベントや、所属している「さぬきうまいもんネットワーク」で企画した贈答用「さぬきふるさ

と恵みセット」として販売してきた。

平成28年は食品営業許可の更新の年であり、起業活動の継続も含め、今後の方向性を検討した結果、これまでどおり起業活動を継続することとなった。



オリーブ加工の様子

(1) 商品づくりの資質の向上

小豆地区での農村女性チャレンジ支援セミナーや6次産業化セミナー、県主催の農村漁村女性起業セミナー等には積極的に参加し、衛生管理や商品づくりについて、熱心に学習した。

(2) 商品の見直し

起業活動として取り組む商品は、グループ員の負担を軽くするため、比較的衛生管理が難しい「からし漬け」や販売機会の少ない「いがり揚げ」の加工を休止することとした。

(3) 「さぬきふるさと恵みセット」の充実
四海漁協女性部に声をかけたところ、加工休止した「からし漬け」の代わりに、「はも天」を組み合わせ、「小豆島オリーブ仲良しセット」として販売することとなり、商品力の向上につながった。



小豆島オリーブ仲良しセット

3 60周年記念行事への協力

平成29年1月18日開催の香川県生活研究グループ連絡協議会60周年記念行事に向けて、今までの活動実績を整理し、事例発表を行うとともに、記念誌等を作成した。

●普及活動の成果

1 食育活動では、これまで継続してきた手法を他の女性団体にも実践しやすいように伝えることで、新たな団体が食育を進められる足がかりを築くことができた。

また、子供だけではなく、高齢者からも食育が求められている声を受け、喜ばれる現状を知り、子供だけではなく、対象を広げて食育に取り組む必要性を認識できた。

2 起業活動では、他の起業グループと協力することで、魅力的な商品づくりにつながった。

また、四海漁協女性部は、28年度のお歳暮企画の参加を契機として、さぬきうまいもんネットワークに新規加入し、島内の女性起業グループの活性化に誘導できた。

3 60周年記念行事の参加を契機に、これまでの取組を改めて振り返り、積み重ねた活動への自負と今後の活動意欲の醸成につながった。



60周年記念行事での事例発表

●今後の普及活動の課題

今年度、他団体と連携することで、グループ員の負担を軽減しつつ、活動の広がりや継続的な活動により、地域に貢献していくことが重要であることが再認識できた。

今後、食育や起業活動を通じた地産地消を推進していくために、食育活動に参加する保護者をグループに勧誘するなど、新規加入を促すことも必要である。